

2023 年度（令和 5 年度）常磐大学高等学校 自己評価表

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
国語科	知識・技能の定着	・語彙や文法について小テストやペアワークを通して反復学習を促し、定着させる。	A	A	・粘り強く学びに向かう態度を養うため、授業毎に振り返りの時間をとっているが、生徒自身がどれだけ主体的に学びを自己調整しているかを測るのは非常に難しい。一方、2025 年共通テストから第三問の実用文が入ることで、よりスピーディに情報を読み取り、処理する能力が要求されることになる。限られた時間の中で、多様な文章を読解する力を育成し、主体性を客観的に評価していくことが課題である。
		・読解法や解答法を段階的に示し、自分がどのように読んだり考えたりしたのかをチェックし、ペアで相互に説明させることで、技能の定着を図る。	A		
	読書への興味関心および思考力・表現力の育成	・教材に関連する本を紹介し、発展学習に繋げられるようにアドバイスをする。	B	B	
		・小論文などの指導において、読書を通して得た知識を基に自らの考えを確立し、相対する意見を踏まえながら論述する手法を習得させる。	A		
	自らの学習を調整しながら粘り強く学びに向かう態度の養成	・ロイロノートを活用して授業の復習をしたり、スタディサプリの授業動画で授業の補強を行ったりさせることで自主的に学習する力を養う。	B	A	
		・定期的に振り返りを行い、学習を通して培った読解力がどのような段階に達しているかを自己分析し、目標を明確にして読解に取り組ませる。	A		
地歴 公民科	基礎学力の定着と理解の深化	・基本的な知識の習得の徹底を、個々の学習状況に応じて支援を綿密に行う。	B	A	・定期考査ごとに「活動計画書」と「振り返りシート」に取り組んだ。今後は、考査の結果と学習方法・時間を関連させ、教科面談を通して個々の生徒に応じた学習支援をしていきたい。 ・ICT 教材（ロイロノートなど）を用いて、生徒が主体的に学習に取り組む授業を展開している。今後は、授業で習得した知識と現代社会の諸問題を生徒自らが結びつけ、より主体的に取り組めるレポート課題を設定したい。
		・授業にリフレクション（振り返り）の時間を設け、生徒の学習状況を細かく把握して指導につなげる。	A		
	社会に対する興味関心の向上	・ICT 教材（ロイロノートなど）を活用し、生徒自らが課題意識を持つて主体的に取り組むことができる授業を展開する。	A	B	
		・生徒が共に学び合い、社会現象を多角的に捉える授業を展開する。	B		
	豊かな思考力・判断力・表現力の養成	・自ら課題を設定し、レポートを作成する経験を積ませる。	B	A	
		・定期考査において「思考力・判断力・表現力」を評価する設問を取り入れ、教員の授業改善につなげる。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
数学科	教員の授業力の向上	・長期休業中等に、教科内で教科指導研究会を定期的実施し、教員同士の授業スキルの向上を目指す。	A	A	・長期休み（夏季・冬季・春季）を利用し、教科指導力の向上を目的とした研究会を数回実施した。内容は充実したものであるが、昨年度同様、全教員が集まることは難しく、今後の課題となっている。授業進度等で統一ができていない所もあれば希薄なコースもある。来年度から全学年新課程となるため、主体性の評価なども含めて科としてまとめていく必要がある。思考力・判断力・表現力を養う授業展開やテスト作成は概ね達成できたが定着させるための工夫はまだ議論が必要である。
	基礎・基本の充実	・授業内での演習や単元テスト、確認テストを計画的に行い、知識の定着を計るとともに、協働的な学びの実践を行う。	B	B	
	主体的な学習による思考力・判断力・表現力の養成	・授業内での主体的な学び（個人・ペアは問わない）から生まれる質問や対話によって、理解力の向上と数学的な論理力を養う。	B	B	
	数学検定の利用による基礎知識の到達度確認	・数学検定を利用して、自己の基礎力の定着を確認する。	B	B	
理科	生徒の実態・理解度に応じた授業展開	・基本的な知識習得の徹底を図る。	B	B	・定期考査における知識・技能の評価は一定の水準に達するが、長期間で見たときの定着率は悪い傾向が見られる。長期的定着率を改善するための授業を含め指導方法の改善が課題である。 ・新型コロナウイルス感染症が５類に指定され、授業中での実験回数が昨年よりも大幅に増加し、深く学ぶことができた。実験結果の分析やレポートの作成、考察についてより深い理解に繋がるように展開・実験内容や評価方法を検討していく。 ・科学系コンテストへの参加や茨城大学教授を招いての実験講義、天体観測会・その他実験を伴う講座・校外で行われる科学系講演会の案内発信などを実施した。今後も生徒が興味関心を持ち、主体的、意欲的に参加出来る企画を検討していく。
		・指導方法の工夫改善に努め、生徒の理解が深まる授業を展開する。	A		
		・資料を読み取り、知識を活用できる読解力を身につけさせる。	B		
	自然科学に関する興味関心の向上	・実験を取り入れながら、科学的に物事を見る力を養う。	A	A	
		・生徒が主体的、意欲的に学びを深められるような企画や各種指導を展開する。	A		
	主体的な学習を行いながら、思考力・判断力・表現力の養成	・観察・実験の結果などを整理・分析した上で、解釈・考察し、発信する力を養う。	B	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
保健 体育科	個人や集団の実態に応じた授業の展開	・昨年度から引き続き、生徒の実態に応じた授業を展開するために、使用する用具の工夫、ゲーム中のルールの変更などを積極的に行う。	B	B	・レベル別の試合を展開することで授業に向かう姿勢は向上したように感じたが教員数、場所の関係で安全の確保が重要な課題である。また、評価についても議論の必要性を感じた。 ・生涯スポーツの单元では昨年よりも「ゴルフ」受講者が増加し、活発な授業を展開することができたが課題の残る種目もあり、来年度に向けて実施種目の変更を考えていきたい。
	生涯にわたって運動に親しむ態度の育成	・保健指導、体育実技指導の両面から生徒の健康にアプローチしていく。 ・卒業後も運動に親しむことができるように、昨年度から新たに取り入れた、「生涯スポーツ」の授業を今年度も継続して実施し、体を動かすことの喜びや楽しさを実感できるような授業を展開する。	A	A	
芸術科	個性豊かな人間性と情操の育成	・近隣のホールや美術館と連携した授業計画をする。生徒が楽しんで主体的に取り組むことのできる ITC を利用した新しい教材や授業の開発をする。	A	A	・ITC を利用した新しい教材や授業の開発を目指し、音楽室にプロジェクターを設置した。また今年度は、新型コロナウイルス感染症が 5 類感染症に移行したことで、水戸芸術館や茨城県立歴史館などの校外学習を実施することができた。しかし、学級・学年閉鎖の関係上、実技や実習が遅れてしまい、計画に沿えないことが度々あった。今後も安心安全を心がけ、教科の情報交換を密にし、生徒の実態に即した授業進度を心がけたい。
	基礎表現力の育成	・生徒の実態に即した年間学習計画を立て、計画に沿った学習指導をする。	B	B	
	個人の能力・進路に応じた指導	・個人の能力、適性に応じた細やかな指導を配慮する。	A	A	
	教科の協力推進	・音・美・書の情報交換をさらに密にし、芸術科としての課題を見つけ、それが解決できるように努力する。	B	B	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
英語科	基礎学力の向上と定着	・ Tokiwa Can-do と「ときわ力」のすりあわせを行い、各学年の基礎力のゴールを明示し、4 技能それぞれの向上をはかる。	B	B	・ 1, 2 学年における 3 観点評価に伴い、3 観点それぞれにふさわしい活動の精査が進み、生徒各自の基礎力向上のための振り返りをする形式が定着してきた。しかし、その精査にかなりの労力がかかり Tokiwa Can-do の新教育課程との照らし合わせまでは及ばなかった。各学年・各コースが目指すべき能力について見直しと共有は欠かせない課題である。
		・ 生徒それぞれが自学方法の質を向上させながら学習に取り組むことができるよう、通常時の学習方法を振り返る習慣をつける。	A		
	英語運用力の向上	・ コミュニケーションの授業を中心に、音読活動等を通して語彙力を高め、読解速度を高める。	A	A	
		・ 表現の授業を中心に、典型的表現を用いて英作文等を重ね、ペアワーク、プレゼンテーション活動等で実際に運用する。	B		
	自分の考え・感想を英語で表現する活動の充実	・ ICT 機器を効果的に使用しながら、英語運用力向上のための活動で得た知識を活用し、自分自身の考えを述べる機会を設ける。	A	A	
		・ ハリーエインリー高校とのオンライン英会話、DMMオンライン英会話等を通して、実際に日本人以外の人とのコミュニケーションで英語を活用しながら、互いの考えをやり取りすることに慣れ親しむ。	A		
	英語検定等、資格試験チャレンジの奨励	・ 学習を通して培った英語力がどのようなレベルに達しているか自己分析と他者へのアピールの材料の 1 つとして、検定のアナウンスと受検のための後押しを行う。	A	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
家庭科	生活に必要な基本的知識・技能の習得および生徒が主体的に取り組むことができる授業と適切な教材の提供	・生徒が主体的に取り組むことができる実践的な授業を展開し、適切な教材を提供する。	A	B	・昨年度と比べ、実習や調べ学習、グループ学習など実践的な活動を多く行うことができた。次年度も更に改善し継続していきたい。主体的に活動する授業展開により、生徒の好奇心をさらに引き出したい。 ・生徒の進捗状況に応じた指導をさらに心掛けたい。 ・ICTの利用方法について、さらに学習効果が高まるよう検討する。
		・生徒一人一人の進捗状況に応じた指導を行う。	A		
		・ICTの効果的な利用方法を研究し、授業の改善を図る。	B		
	生活課題を主体的に解決するとともに、生活の充実・向上を図る能力と実践的態度の育成	・学習したことを生かし、自らの生活課題の解決を図ることができるよう、実践的な態度を育成する。	A	A	
情報科	コンピュータや情報ネットワークを活用する知識や技能の習得	・アルゴリズムを表現する手段、プログラミングによってコンピュータや情報通信ネットワークの機能を使う方法や技能を身に付けさせる。	B	B	・プログラミングなどの実習を多く取り入れた授業を展開していきたい。生徒の進み具合に注意しながら、論理的思考力の育成に尽力したい。また、PCスキルに大きな差があるため、苦手な生徒や欠席した生徒へのフォロー体制を充実させたい。 ・共通テストに追加されるため、多くの情報を集め、受験対策を実施したい。
		・コンピュータやネットワークを活用して、情報を適切に収集・処理・発信する基礎的な技術と技能を習得させる。	A		
	情報を正しく扱うためのマナーやルールの理解および主体的に活用する態度の育成	・研究レポートの作成を通して、情報を収集し、必要な情報を利用する力を育成する。また、画像の利用を通して、著作権やマナーを理解させる。	A	B	
		・発表体験を通して、自分の考えをまとめ、主体的に相手に伝える力を育成する。また、グループワークを通して他の意見との比較をさせる。	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
教務部	観点別評価の適正な運用と主体的学習態度の育成	・職員全体で共通理解を図りながら、観点別評価についてより有効に活用・運用していくための方策を検討する。	B	B	・観点別評価に関して、共通認識の構築および各教員がより深く理解できる機会を設け、生徒にとって効果的な学習指針となるよう研究する。 ・校務システムの活用により、より効率的な業務のあり方を推進する。
	各分掌間の円滑な連携と教育活動の活性化	・教育活動が円滑に行われるよう、マニュアル等を整備し、全職員の共通理解と協力態勢を構築する。	A	A	
	新教務システムの導入と円滑な運用	・新しい教務システムについてマニュアル化し、円滑な運用と作業の効率化を目指す。	A	A	
	学校行事の円滑な運営	・各分掌と連携し、作業の重複等を洗い出して効率化を目指す。実施後には検証し、次回へ向けて改善策を検討する。	B	B	
生徒部	水戸で一番制服をきちんと着る学校	・定期的な駅、学校周辺の巡回を実施する。	A	A	・校内・校外での服装や行動についての生活指導は継続的に必要である。特に教員間の意識共有が大切。部活動内、クラス内で友人トラブルが目立った。生活アンケート・面談・カウンセリングの他にもいろいろな角度からの生徒支援を考えていく必要がある。
		・全職員をあげての朝の服装指導、テスト期間の校外巡回を行う。	A		
	安心安全な校内環境の維持	・各部活動キャプテンとの面談、生活アンケートを実施する。	B	B	
	生徒会との連携向上	・校則サミット、生徒会との意見交換会を実施する。	A	A	
入試広報部	広報誌、学校案内パンフレットを通した学校理解の促進	・パンフレット、T-color、チラシ制作のタイミングと効果を検証し、年間を通して広報活動に効果的な制作予定を模索する。	B	B	・パンフレットと TokiwaStyle 以外の広報ツールの、配布の狙いやタイミングにより、戦略的に制作する必要がある。SNS の活用自体は増えたが、投稿内容は活動報告が主だったので、本校の教育観等が伝わる内容にしたい。塾の訪問数は飛躍的に増えた。分掌内の担当や係りを割り振ることで、担当以外のことには関わらない雰囲気が生じることがあった。もっと部内の連携が取りやすい計画を立てたい。入試制度や生徒数減などの状況や課題を、教員全体で考える機会を持ちたい。
		・パンフレットやポスターでこそ伝えることができる情報を精査し、SNS 等に移行できるものはそちらを活用する。	B		
	学校見学会の実施および説明会参加	・オープンスクールと秋季学校説明会では在校生の活躍の場を増やし、生徒がいきいきと活動する高校をアピールする。	A	A	
		・進路や部活動の実績、学校行事の報告などを説明内容に組み入れ、生徒の活躍を主とした説明を行う。塾に対する広報活動を充実させる。	A		
	教員の円滑な連携と効果的活動の模索	・入試広報部内の連携を密にし、業務の可視化に取り組み、ねらいや課題を共有する。	B	B	
		・入試広報部以外の教員も広報活動の一役を担えるよう、入試広報の活動内容を全教員と共有する。	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
保健部	生徒が心身ともに健康な状態で学校生活を送る支援の充実	・保健室経営計画に基づき、適切な保健室経営を行う。	A	B	・生徒の安心・安全な学校生活を支援するため、引き続き、教職員・保護者・SC との連携を密にし、心身の健康の保持増進についてチーム・組織で取り組む。そのための研修等の開催も検討していきたい。同時に、今後も健診後の受診勧奨を速やかに行い、生徒の疾病異常の早期発見に努める。知識定着のための活動が滞る面もあったため、生徒が主体的に健康管理をする力を醸成できる方策を継続的に探る。また、心のケアの面でもグループエンカウンターとアサーショントレーニングが実施でき、生徒のコミュニケーションスキル獲得の一助となった。今後もカウンセリングを恒常的に実施する。
		・日頃から健康相談等がしやすい環境づくりに努め、担任や学年、教科担当者、管理職、保護者やスクールカウンセラーと連携を密に図る。	A		
		・各健康診断を学校医・学校歯科医、委託検診機関と連携しながら適切に実施し、生徒の健康状態を把握する。結果に応じて、異常や疾病の疑いのある生徒には、できる限り速やかに受診勧奨を行うなど、生徒の健康の保持増進に寄与する。	B		
		・保健日より・相談室日より、掲示物を作成し、感染症対策等の正しい知識の定着を目指すとともに、生徒が主体的に心身の健康管理ができる力の醸成を図る。	B		
	教育相談活動の充足	・週2回のスクールカウンセラーのカウンセリングを適切に調整・実施し、切れ目のない支援に繋げる。	A	A	
		・生徒のコミュニケーションスキルの一助となるよう、今年度もグループエンカウンター（1年生）やアサーショントレーニング（2年生）等を企画・実施する。	A		
	適切な学習環境整備	・学校薬剤師による環境衛生検査を適切に実施し、不十分な点があれば全教職員で共通理解し、改善するよう努める。	A	A	
進路部	生徒の主体的な進路決定・キャリアビジョンの育成	・二者／三者面談を受けて、進路部からの情報発信をする。（大学入試情報・共通テスト分析・新傾向の出題等）	B	B	・学年団を通じて模擬試験に対する新たな取り組みが具現化されたこと、校内における進路行事が学年団の最大限の協力によって運営がスムーズに出来たことなど、教員チームでの援助が具現化されたと考える。また、3学年の国公立大学一般選抜に向けて、進路室を中核に出願検討を各担任と行い、フィードバックできたことも進展した点として捉える。今後は、ますます多様化する入試制度に立脚し、生徒の学力と進路を年間に複数回検討する機会を設け、組織的に生徒の進路実現につなげる運営を進めたい。
		・キャリアガイダンス・職業講話・学びの設計書を実施し、進学後の人生設計の視座を持った指導を行う。	A		
	進路実現に伴う学力の向上・教員チームでの援助	・模試分析等を通じた学習方法・フィードバックを、学年教諭と連携して行う。（具体的な勉強方法についての支援など）	A	A	
		・HR や進路行事における「学年団－進路部」の協力を体制強化し、進路実現に応じた学習スタイルの支援を進める。	A		
		・進路ロードマップに沿って学年団の教員との連携を図る。（学年付の進路部スタッフ・学級担任との情報交換）	B		
		学校法人内連携と教育的リソースの活用	・常磐大学／常磐短期大学等との連携を進め、生徒が高度な学問領域に触れ、自らの進路を具体的に考える機会をより多く設ける。	A	

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への課題
特別活動部	生徒主体の学校行事	・新入生歓迎セレモニー、部活動壮行会等儀式的学校行事において、生徒が積極的に企画運営に関わるよう支援する。	A	A	・ときわ祭は生徒中心の運営が軌道に乗り、知識が継承されている。しかし、その他の行事はコロナ禍の3年間で ICT 化していたこともあり、生徒実行委員がコロナ以前の行事を知らず、今後の生徒主体の運営が難しいと感じている。また、ICT 化したことで、むしろ元の形より望ましいものになった行事もある。行事を通してどんな力を生徒に身につけさせたいのかということを明確にした上で、どんな形式で実施するのかということを検討しなければならない。部活動に関しては活動時間の見直しが行われ、生徒は学習に向かう時間が確保されつつある。部活動に対する生徒の多様なニーズを踏まえ、さらなる環境整備を推進したい。
		・ときわ祭において、生徒が企画運営の中心になるよう支援する。	A		
		・クラスマッチを通して運動に親しむ態度や、クラスの団結力、クラスへの帰属意識を育む。	B		
	生徒会活動の活性化	・意見箱等で生徒の要望を吸い上げ、活発な生徒評議会・生徒総会での議論を通して、よりよい学校作りに貢献する。	B	B	
	部活動の活性化	・集団活動を通して、協調性・自主性・責任感・連帯感を育成し、豊かな人間性を育む。	A	B	
		・練習方法の工夫や効率化を図る。	A		
		・部活動加入率が75%以上になるように積極的な部活動参加を促す。	B		
	委員会の活性化	・生徒が主体的に運営に関わり、学校生活の向上を計る。	B	B	
研究開発部	探究プログラムの進化と精選、評価指標の検討、他校・外部教育機関との連携	・水戸市や笠間市など地方行政と連携した課題解決型学習に取り組み、社会に開かれた探究プログラムを開発し、生徒の資質・向上につなげる。	A	A	・今年度は地域探究学習としてフィールドワークを実施し、昨年度よりも地域理解を深めることができた。これを来年度も計画していきたい。また、第1・3土曜日に活動している「サタチャレ」が継続的に実施でき、来年度はさらなる地域や民間企業との連携をすることで、生徒の可能性を広げていきたい。 ・「探究」専用の SNS アカウントを開設し、定期的に投稿を継続できたが、全コースでの投稿を目指していきたい。 ・ICT 教育については、iPad を導入して5年目となるため、ICT 機器活用の充実のため、教科を越えた情報交換の場を提供し、各教員のスキルの向上を目指したい。
		・学校全体で育成する資質・能力を示したときわ力を踏まえたルーブリックで、本校の課題を検証し、更なるときわ力の向上を目指した授業プログラムを開発する。	A		
		・SNS 等を利用して学校外への発信力を高め、本校教員の探究への理解を向上させることや、他校や外部機関とのつながりをつくる。	B		
	ICT を用いた協働学習の推進と情報リテラシー・情報モラルの育成	・ICT を用いた生徒の協働学習を推進ため、教科を超えた情報交換の場を設けるなど環境整備に努める。	B	B	
		・教科教育や探究活動の中で情報リテラシーを高めるプログラムを展開する。また、教職員に対しても情報モラル・スキルを高める機会を設定する。	A		
	社会に開かれた教育活動の展開と連携	・大学特講を通して、学問分野に対する興味・関心を高め、社会で必要とされる資質・能力の育成に努める。	A	A	
		・外部団体と連携した事業を開発し、生徒が地域社会の中で成長する場を設ける。	A		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
国際教育	国際文化を体験することによる、外国人と日本の文化を共有する機会提供、および外国文化に対する興味拡大	・海外研修、短期や長期留学の経験、オンラインディスカッション、バーチャルミーティング、本校生の留学の機会、外国人留学生の受け入れ、文化交流の機会を通じて、外国人や外国の文化と交流する本格的な機会を提供する。文化の違いを体験して理解し、自分たちの未来を切り拓く手段を見つける。	A	A	・2023年には、アメリカで1年間の留学から帰国した学生を1人迎えた。彼女の経験はユニークで、外国での生活に適應する際の初期の課題に直面したが、時間とともに立ち直り、アメリカの学生生活を楽しむようになった。さらに、2人の学生がノバスコシア州カナダで留学の冒険に出た。彼らの経験は他のプログラムとは大きく異なっていた。この特定の機会は、新しい学校との協力から生まれた。 ・2024-2025年の学年に向けて、さらに3人の学生を1年間の留学プログラムに受け入れた。彼らの今後の旅は、エキサイティングな学習体験と文化的な浸透を約束している。 ・ハリーエインリー語学研修の復活と共に、高等教育の学生向けにカンボジアで新しいプログラムを開始した。カンボジアプログラムは参加者が少なかったものの、全体的には大成功であった。 ・2023年は、外国からの留学生にとっても重要な年であった。アメリカとオランダからそれぞれ2人の学生が来日したが、残念ながら、アメリカからの学生はわずか6週間の参加だったが、オランダからの学生は9月に到着し、3月末にオランダに戻る予定である。2023年のバーチャルレッスンは、海外に行けなかった学生や英語の練習をしたい学生、異なる文化を学びたい学生にとって素晴らしい方法だった。私たちはほぼ毎週、カナダの高校生とオンラインで会議を行った。

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
1 学年	安心、安全な学校作り	・担任面談、学年面談を通して生徒との信頼関係を構築する。	A	A	・学年主任面談は実施予定。 ・担任面談で、担任の先生との関係の悩みは相談できないのではないかな。 ・「毎日、机に向かう」を励行する。 ・検定試験の予定揭示。 ・模試対策、教員研修の充実。 ・「学ばない部員」の撲滅。 ・「学ぶ部員」の育成活動。 ・リテラシーの向上。 ・チャット GPT の活用、課題発見。
		・感染症に対して、生徒個人の尊厳を大切にし、丁寧に対応する。	A		
		・生徒間トラブルの早期発見、早期対応。	A		
	学習習慣の定着	・毎日、「まなぶ」という活動を習慣化させる。	B	B	
		・検定、資格、コンテストへの挑戦を積極的にうながす。	B		
		・校外模試、校内考査の有効活用。	A		
	探求活動、課外活動などへの参加を通して自己の向上を企図	・探究の授業を通して、発見した課題に対する解決の仕方を学ぶ。また、その活動を継続する大切さを学ぶ。	A	A	
・部活動を通して、人間性の向上を図り、「学習との両立」の大切さを図る。		A			
2 学年	創意工夫をしながら、自らの学力向上への努力	・1 学年で意識した学習時間のマネジメント能力を進化させ、自らの学習習慣を振り返ることができるようにする。	B	A	・各コース内において、コースごとの特色を活かしながら学習習慣についての振り返りを行い、それをもとに個別最適化に向かうことができた。しかしながらその取り組みを組織としてフィードバックする段階までには至らなかったところに反省点がある。 ・今年度は修学旅行をはじめ、フィールドワークなど、校外の環境に触れる機会が多かった中で、生徒同士或いは教員と生徒が様々な問題解決に協働してあたることができたと思われる。 ・本学年のひとつの大きな目標のひとつに「志望理由書を書けるようにする」というものがあり、1 年を通した指導の企画を外部業者とともに計画していたが、感染症の流行に伴う休校措置などで計画通り実施することができなかった。余裕のある HR 計画が必要であった。
		・外部アセスメント（リクルート・ベネッセ）の結果に基づく面談を通して、自主学習の質の向上を自ら進んでできるようにする。	A		
	協働することの強さを認知	・探究学習や HR 活動を通して他者との協働の良さを知ることができるようにする。	A	A	
		・校外での活動を通して様々な大人と接する機会を持つことで、多様な生き方に気がつけるようにする。	A		
	自己にとって最適な進路選択	・模擬試験の結果や、それらに基づいた各種面談を通して、自己の目標達成のために最適な進路選択をすることができるようにする。	A	A	
		・各種進路行事を通して、自己の進路選択における根拠を視覚化し、次年度に向けた動機付けができるようにする。	B		

評価項目	具体的目標	具体的方策	評価		次年度（学期）への主な課題
3 学年	キャリア教育の充実	・自分らしく社会貢献するあり方を思い描き、一人一人が進路目標を表明することで、自他を肯定し協働する姿勢を育む。	A	A	
		・2年間で培ってきたグローバルな視点を社会においてどのように活用するか、生徒自らが考え進路開拓に挑むよう支援する。	A		
	学習支援の充実	・学習時間対成果の分析を主体的に行い、目標達成に向け課題を設定し計画的に取り組み、方法を模索し続ける姿勢を育む。	A	A	
		・担任面談やコース・進路部面談を重ね、生徒と目標や課題を共有することで支援の充実を図る。	A		
	特別活動における統率力の育成	・部活動や学校行事において、最高学年として自他の役割を認識し、周囲に働きかけて目標達成に向け行動する力を育む。	A	A	

判定規準 A:大変よくできた B:よくできた C:ふつう D:やや不十分 E:不十分